

Ⅲ 出土遺物の報告

1. 瓦 類

瓦類は大量に出土し、その時期も飛鳥時代から近世にまでわたっている。これらは、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・魂瓦・鷗尾・隅木蓋瓦・塼などで他に特殊瓦製品がある。

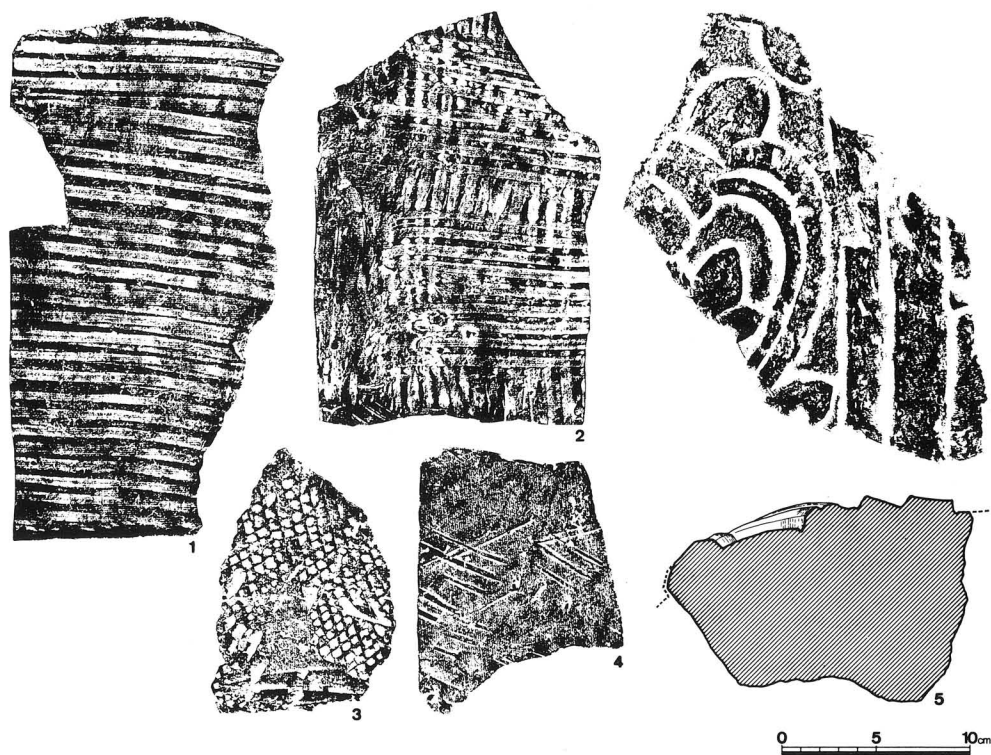
A 丸瓦・平瓦

81-12-I トレンチ池埋土中と、81-11-Ⅲ トレンチ拡張区の地山直上の上下2層の整地層、および同拡張区検出の掘立柱建物（BS 2115）柱掘形から出土した丸瓦・平瓦は、その特徴・共伴遺物からみて7世紀代のものとみられる。

i 丸瓦 ほとんど玉縁丸瓦で、行基丸瓦が1点ある。玉縁のつくり方は2種あり、本体と玉縁とを一連でつくるものと、玉縁部分を別につくり後に本体に接合するものがある。後者は、若草伽藍創建時に作られた軒丸瓦の丸瓦部玉縁接合の技法に一致する。今回は後者の出土量が多い。

ii 平瓦 粘土板を成形台に巻きつけ、円筒を作り、乾燥後4等分する「桶巻作り」⁷⁾の技法によっている。凸面に残る調整技法から3型式4種に大別できる。

I a (第63図1) なでつけ調整を施した痕跡をとどめるもの。端部に凹凸を施した板状器



第63図 出土瓦の拓本

具によっていねいになでつけて調整する。したがって、平瓦凸面には幅広い凹線(幅0.5～0.7cm, 深さ0.1cm)が横方向に0.5cm間隔で並ぶ。凹面は調整しない。側面に、円筒から4分割した際の分割痕跡をとどめるものもある。

I b なでつけ調整を施した痕跡をとどめるもの。凸面にはいねいに施された滑らかな調整痕を残す。ナデの方向は、縦と横の両者がある。横面、側面ともI aと同様である。

II (第63図2) 凸面に平行叩き目圧痕(刻線幅0.2～0.3cm, 間隔0.7cm)を残す。凸面調整として粗いナデを施す。凹面は不調整。

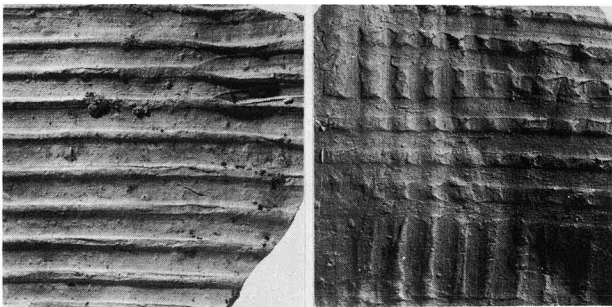
III (第63図3) 凸面に斜格子叩き目圧痕(刻線幅0.1～0.3cm, 間隔0.3～0.5cm)を残す。凸面は部分的にナデ調整を施す。なお、刻印「上」を押捺した平瓦が東院地区から2点出土した。「上」は正方形(1辺1.75cm)の刻印で、平瓦凹面に押捺している。瓦面にあらわれた状態では陰刻である。

B 軒丸瓦 (第65図)

i 7世紀前半の軒丸瓦 7種類の軒丸瓦が出土している。いずれも単弁蓮華文を瓦当面に飾る。9弁蓮華文の軒丸瓦(2)は、若草伽藍創建時に用いられたものである⁸⁾。8弁蓮華文軒丸瓦(1)は文様構成がきわめて整っている。四天王寺に同范品がある⁹⁾、1・2ともに瓦当裏面がゆるく盛りあがり、回転台で調整したかのような痕跡をとどめる。また、丸瓦の接合に際しては、両者とも丸瓦を瓦当裏面の上端ちかくに押しつけ気味に置き、少量の接合粘土をあてて接合する。文様構成から受ける感じは大きく異なるが、製作技法はよく似ている。

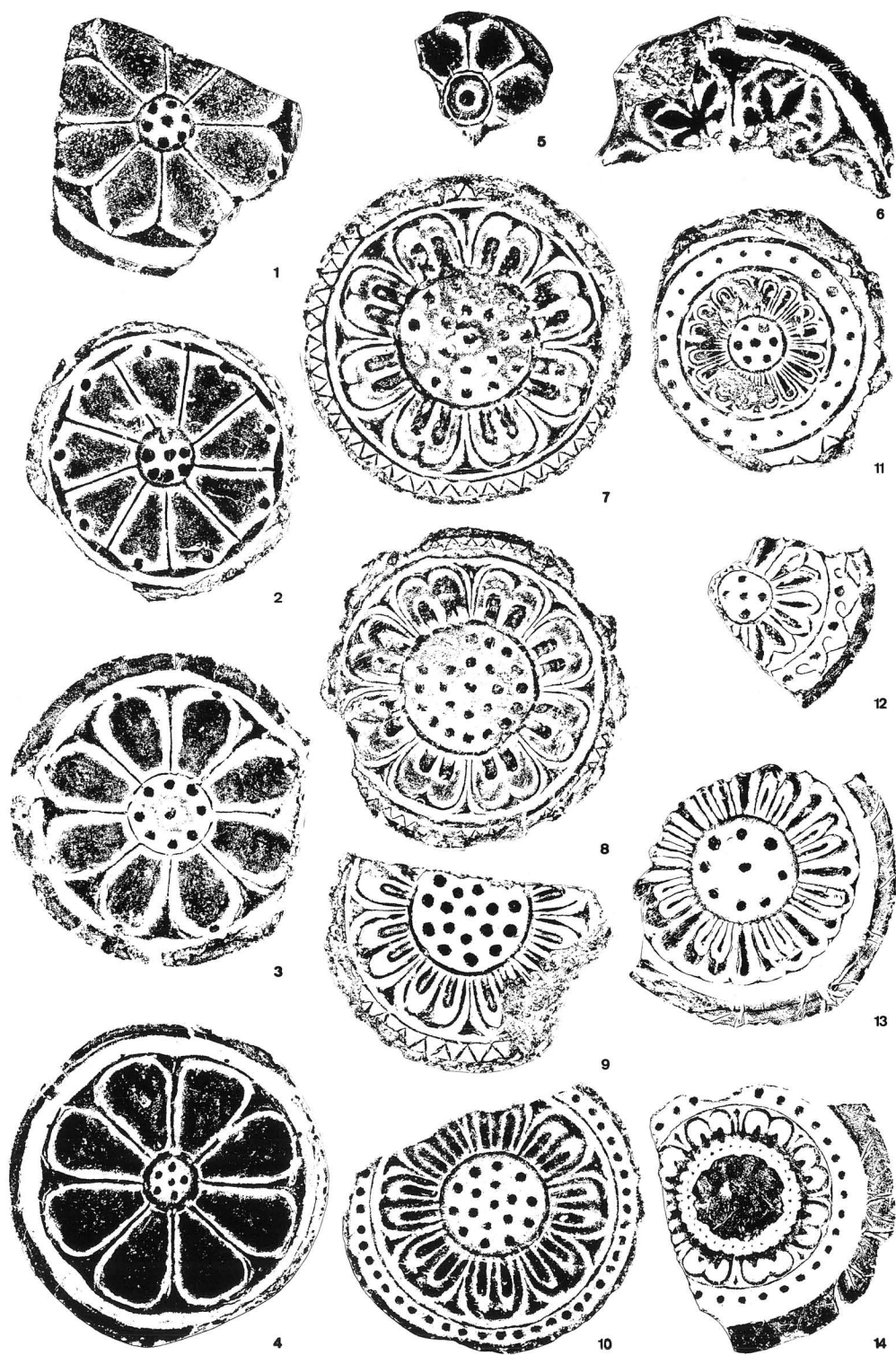
8弁蓮華文軒丸瓦(4)は、中房が大きく、低い半球状を呈する。蓮弁の先端に珠点をおく。瓦当裏面は平坦であるが、回転台で調整を加えた痕跡をとどめる。中房を小さく作った8弁蓮華文軒丸瓦は、蓮弁の先端に小さい珠文をおくが、あまりに小さいため、個体によっては痕跡程度にしか認められない部分や、全く認められないものもある。このため、従来この小珠点を持つ部分と持たない部分とが別范で、瓦当外径もやや異なるものとされてきたが、今回、両者が同范であることを確認した。

単弁6弁蓮華文(5)は小形の瓦である。中房は比較的大きく、半球形に突出し、圏線をめ



第64図 平瓦凸面の調整痕

ぐらし、中心に蓮子1個を置く。弁肉は丸味を帯び厚肉で、弁端はやや尖る。外区は剥離している。瓦当裏面は平坦で丁寧になで仕上げする。従来、この軒丸瓦がきわめて小型で、剥離した文様部のみ知られていたため、



第65図 軒丸瓦の拓本



第66図 軒平瓦の拓本

文様磚の剝離したものである可能性も考えられてきた。しかし今回の出土品には、接合した丸瓦が剝離した痕跡と、丸瓦部凹面と瓦当裏面との接合のために置いた粘土が見られる。

6 弁蓮華文軒丸瓦(6)は、肉厚の尖端5葉パルメットを置く。今回出土のものは瓦当面の一部しか残っていないが、本来中房は断面台形状に高く突出する。蓮弁は平坦であるが、パルメットは弁面より著しく隆起している。弁端には、小珠点がわずかに認められる。

ii 7世紀後半の軒丸瓦 4種類出土している。いずれも8弁蓮華文を瓦当面に飾るものであり、西院伽藍創建に際して作られたもの(7)と、その系譜をひくものである。蓮弁の状況はよく似ており、それぞれの蓮弁が強く反転し、仏像の台座を飾る蓮弁を思わせるものもある(7・8)。外縁には線鋸齒文をめぐらす。外縁に球文をめぐらす軒丸瓦(10)は中房もさほど大きくなく、弁区は平板である。瓦当裏面はいずれも平坦に仕上げている。

iii 8世紀以降の軒丸瓦 出土した軒丸瓦のうち、12世紀までのものについて記す。8世紀の軒丸瓦は複弁8弁蓮華文を内区に飾っている(11)。よく似たものが平城宮天平年間のものにあるが、同范品ではない。外区外縁に唐草文をめぐらせた軒丸瓦(12)は8世紀末葉のものである。外縁の唐草文は、主茎が波状にめぐるものであり、子葉が内外縁の境から派生し、内縁をめぐる球文の間にのびる。したがって外区内縁には珠文と唐草文とを交互においたようにみえる。内区の蓮弁は複弁であるが、間弁をもたないため、単弁16弁のように見受けられる。大ぶりの複弁8弁軒丸瓦(13)は弁端が厚く作られ、間弁は先端がわずかに円く棒状である。内・外区を画する界線の内側は、弁端の形にそって連弧状になる。中房を八花形に作る軒丸瓦(14)は、中房と弁区との間に小珠文を密にめぐらす。13・14ともに11世紀半ば頃のものである。

C 軒平瓦 (第66図)

i 7世紀前半の軒平瓦 2種類出土した。1単位の忍冬文を彫刻し、それをスタンプとして用い、上下交互に押捺したもの(1)。本例は1単位分の破片。均整唐草文軒平瓦(2)の中心飾り内部は円形をなす。中心飾り下の結節は左向きである。唐草文は主茎・結節・そこから生じる半パルメットを単位とし、3回反転させている。しかし、3単位めは瓦当外にはずれる。また、第1単位の半パルメットの1葉が第2単位の主茎になり、第2単位の半パルメットの1葉が第1結節からの直茎と重なっている。第3単位付け根に蕾が付く。第3単位主茎は2本の輪郭線であらわす。描線は太く肉づきも浮彫り風に表現され写実的である。顎面には瓦当面に沿って各2条の沈線で区画した中に、均整忍冬唐草文を雄渾な筆致で篋描きする。顎面文の方が瓦当文に比してパルメットの単位が明確である。平瓦部凹面には糸切痕・粘土板の合わせ目痕が残り、粘土板巻き付け技法で作られている。側面はヘラケズリし、側縁凹面側を面取りする。

ii 7世紀後半の軒平瓦 2点出土した。いずれも均整忍冬唐草文を瓦当面に飾った軒

平瓦である(3・4)。3は西院伽藍創建時のものである。中心飾りの外郭が上下に分かれる。唐草文反転の状況が2によく似る。平瓦部凹面には粘土板巻き付け技法によって作られたものとよく似た粘土板の合わせ目のはがれ痕があり、剝離面には指によるなでつけ痕が凹凸をなして残っている。4は、中心飾りが扁平で、内郭唐草文各単位の基部には蕾がない。平瓦部凹面には、3と同様な粘土板合わせ目のはがれた痕跡が認められる。



第67図 軒平瓦の剝離痕

Ⅲ 8世紀の軒平瓦 5点出土した。いずれも均整唐草文軒平瓦である。中心飾りに対葉花文を伴う軒平瓦(5)は上外区に珠文を、下外区に線鋸齒文をおく。唐草文は半パルメットと杏葉形パルメットを交互におくもので、左右4単位ずつである。6・7・8はいずれも平城宮出土軒平瓦との同范品である。6は、十字形中心飾りをもつ小形の軒平瓦。7は圈線が外区をめぐる。8は4回反転軒平瓦である。9は、文様構成が8によく似ている。

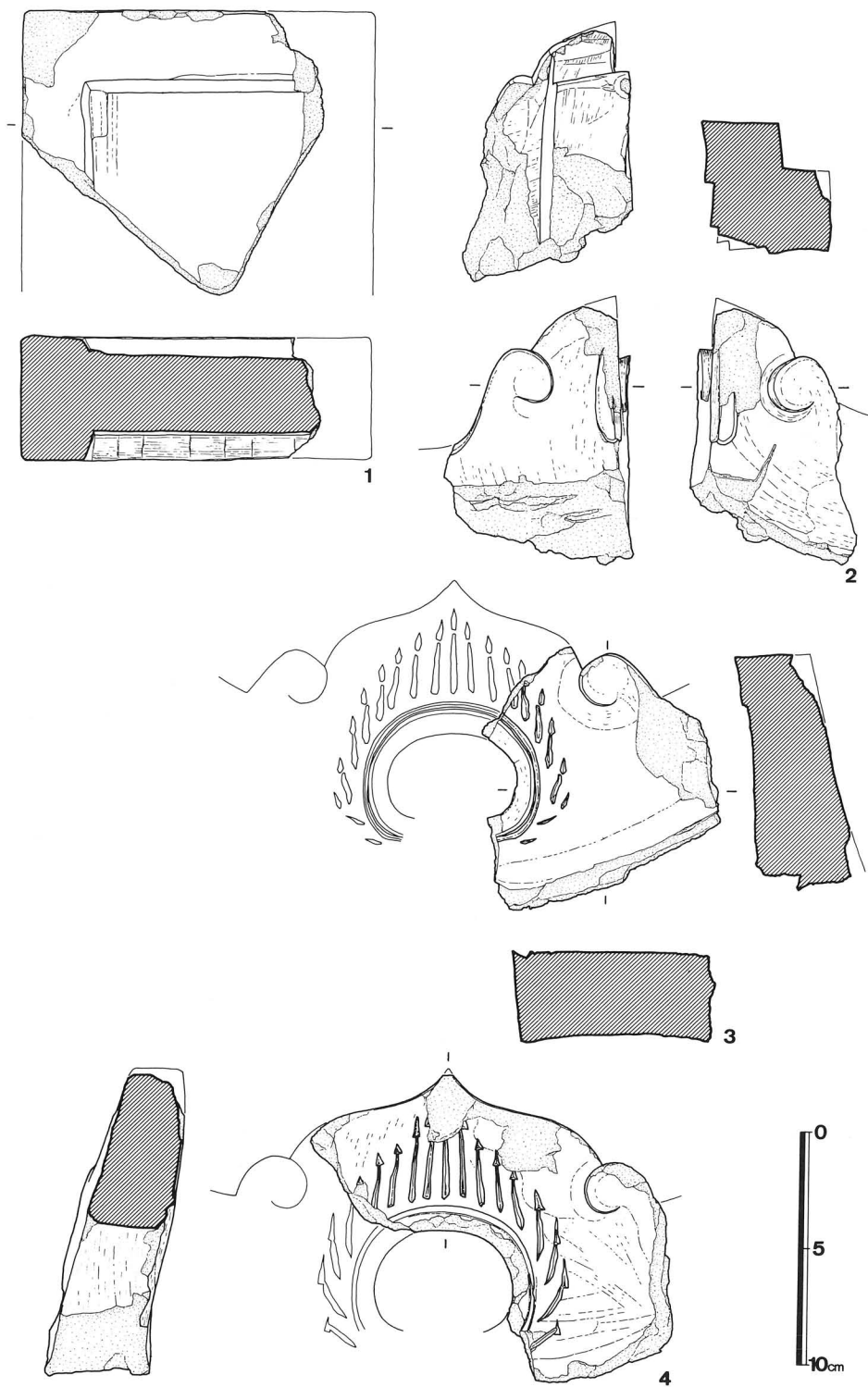
Ⅳ 9世紀以降の軒平瓦 平安時代から室町時代にわたる。10～14は平安時代の軒平瓦である。12・13は平安時代初め頃に属し、14は平安時代後期に属す。15～19は中世の軒平瓦である。15は10に系譜を求めることができるものであり、鎌倉時代に降るものと考えられる。17・19は蓮華を横から眺めた中心飾りをもつものである。

D 鷗尾

聖霊院前トレンチから3点出土した。それらは鰭と右側面縦帯の破片である。鰭(1.長さ27cm, 幅24cm, 2.長さ23cm, 幅21cm)は内外面に段型(幅約8cm～13cm)がある。縦



第68図 鷗尾



第69図 瓦製品の実測図

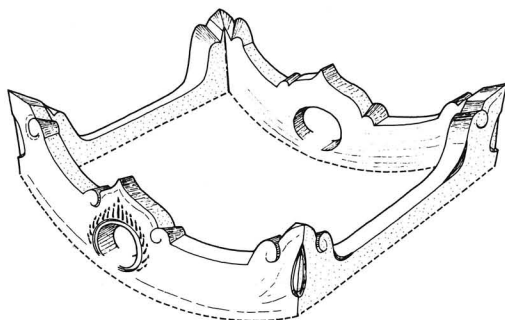
帯の破片(3)は、断面方形と3角形の2条1組の突帯の内側に深彫りの忍冬文を飾る。昭和14年に行われた東院伝法堂修理工事の際に礎石下から出土した破片と酷似している。同一個体の可能性がある。

E 埴

西院地区聖霊院・綱封蔵前トレンチから異形の埴が3点出土している。共伴遺物・焼成・色調などからみて7世紀代のものと考えることができる。いずれも破片であるが、復原すると1辺15~16cm、厚さ5~6cmになる。平面の両面とも縁(幅2.3~3.3cm)を残し、内側に方形の凹部(深さ0.6~1.5cm)をもうける。この埴は両面とも平坦ではなく凹部をもつことから、床面に鋪埴したのではなく、壁面にはめこんだものと考えられる。

F 特殊瓦製品

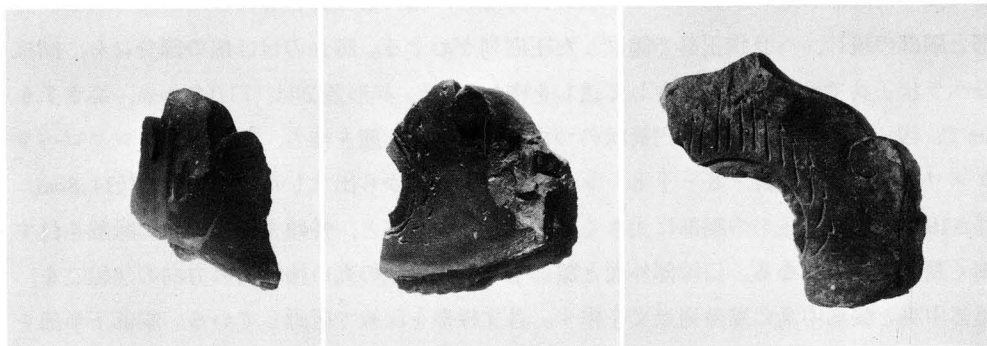
屋蓋の一部と見られる瓦製品であり、2点出土した。1は中央に円孔をもつ宝珠形の左右に、内側に巻きこむ蕨手形の凸出部をもつ板状(厚さ3~4cm)の瓦製品である。円孔の周囲には刻線によって火炎をめぐらす。2は隅の部分であり、直角の2面がある。各面とも唐草文をけずり出している。寺蔵品に1に似た破片(2)がある。これらから若干の復原を試みた(第70図)。全形復原は困難であるが、両隅が中央より高くせり上がるように作られている。長谷寺所蔵の銅板法華説相図(第71図)にあらわされた三層多宝塔各層屋根の隅に、今回出土した資料に似た表現がある。



第70図 異形瓦製品の復原図



第71図 長谷寺蔵 銅板法華説相図



第72図 異形瓦製品

2. 土 器 類

過去4年間にわたる発掘調査で出土した土器の量は膨大である。古墳時代の土器・埴輪、斑鳩宮時代の土器、仏事に使用した鉛釉陶器（緑釉・二彩・三彩）・須恵器なども少量含まれるが、大多数は中世・近世の土器であって、寺を維持・管理した僧達が日常生活で使用した雑器類である。これらの雑器類には、在地で作られたものの他に全国各地で生産されたものが含まれており、当時の経済活動を知る上で貴重な資料である。しかしながら量が多いため、産地同定等の検討もすんでいない。中世・近世の土器・磁器については本報告でとり扱うことにしたい。ここでは昭和56年度の調査に限り、主として古代に属す遺構から出土したものについて概要を各遺構ごとに述べる。

なお、7世紀代に位置づけられる土器は、各トレンチで遺構にかぎらず包含層や整地土からも少量ずつ出土した。今回は遺構に伴って出土した良好な資料を一括して報告する。

A 7世紀前半の土器

7世紀前半から中頃にかけての時代の良好な資料が出土した地区は、西院地区の81-8-I, 81-11-Ⅲトレンチと律学院・宗源寺北側の81-7-I・Ⅱ・Ⅴトレンチである。

第81-11-Ⅲトレンチでは、奈良時代の整地層下部から、須恵器杯蓋(1)、小型壺(6)、SG 2110の埋土中から須恵器の台付長頸壺(9)が、SB 2120の掘形から須恵器の異形壺(2)が出土した。

杯蓋(1)は、口径11.1cm、高さ3.0cmで、宝珠形のつまみを付す狭い頂部と、内湾するカーブで端部にいたる縁部からなる。端部内面にはかえりを持つ。頂部外面をロクロヘラケズリで調整する。小型壺(6)は、口径6.1cm、高さ7.1cmで、丸底の底部から内湾する寸詰りな胴部と、外反気味に立ち上る短い口縁部からなる。口縁部は、玉縁状に小さく外側に肥厚する。口縁部から胴部上半部はロクロナデ、胴部下半をロクロヘラケズリで調整する。底部外面は不調整で、乾燥時についたと考えられる板目状の圧痕を持つ。内面には、コークスと思われる黒色有機物が付着する。台付長頸壺(9)は、口縁部と脚・台部を欠損するが、肩の張った短形に近い胴部にラッパ状の口縁部と、裾の張る脚台を付した形態である。肩部と胴部の境に、ヘラ状工具で施文した圧痕列がめぐる。脚台の付け根の部分にも、同様なヘラ状工具で外側から突きさして透しを施している。異形蓋(2)は、口径9.4cm、高さ7.6cmで、浅い杯状の器の底部に円筒状のつまみを付した形態を持ち、頂部外面をロクロヘラケズリで調整する。81-8-I トレンチ土壌 SK 2142から出土した甕(3)は、口径14.8cm、高さ19.0cmで算盤玉形の胴部に大きく外方に開く脚台部と、外傾する広口の口縁部を付す細く長い頸部からなる。口縁部外面と頸部上半部に、先の丸い棒で斜め方向の沈線文を、頸部中央と胴部中央に櫛歯列点文を施す。各文様帯を沈線で区画している。胴部下半部をロクロヘラケズリで調整する。

中間地区の律学院、宗源寺北側のSD1014から土師器杯 C(5)、第82-7-II トレンチ SK 10 21から土師器杯 C(4)、SD 1008から須恵器壺(8)、第81-7-IV トレンチ SD から須恵器平瓶(7)が出土した。杯 C(5)は、佐波里碗を模した形態で、丸底と内湾する口縁部からなり、口縁端部近辺が外反する。底部外面をヘラケズリ、口縁部に横方向に粗いヘラ磨きを、口縁部内面には、2段の斜放射暗文を施す。杯 C(4)は、5 に比べ器高が低く、口径13.2cm、高さ4.6cmで、平底に近い底部と内湾するカーブを描き、口縁部近辺で真直に立ち上る口縁部からなる。底部上半部はヨコナデで、それ以下の部位は不調整である。内面には、ラセン暗文と細かい斜放射暗文とを施す。壺(8)は、口径10.5cm、高さ16.9cm、丸底に近い平底に卵形の胴部と、外反する広口の口縁部を付した形態である。胴部に三条の沈線を施し、二つの区画をつくり、それぞれに櫛歯波状文を施す。底部から胴部上半部をロクロヘラケズリで調整する。平瓶(7)は、狭く丸底に近い底部に、外方に開く胴部と、円筒形に近い口縁部を付した背部からなる。

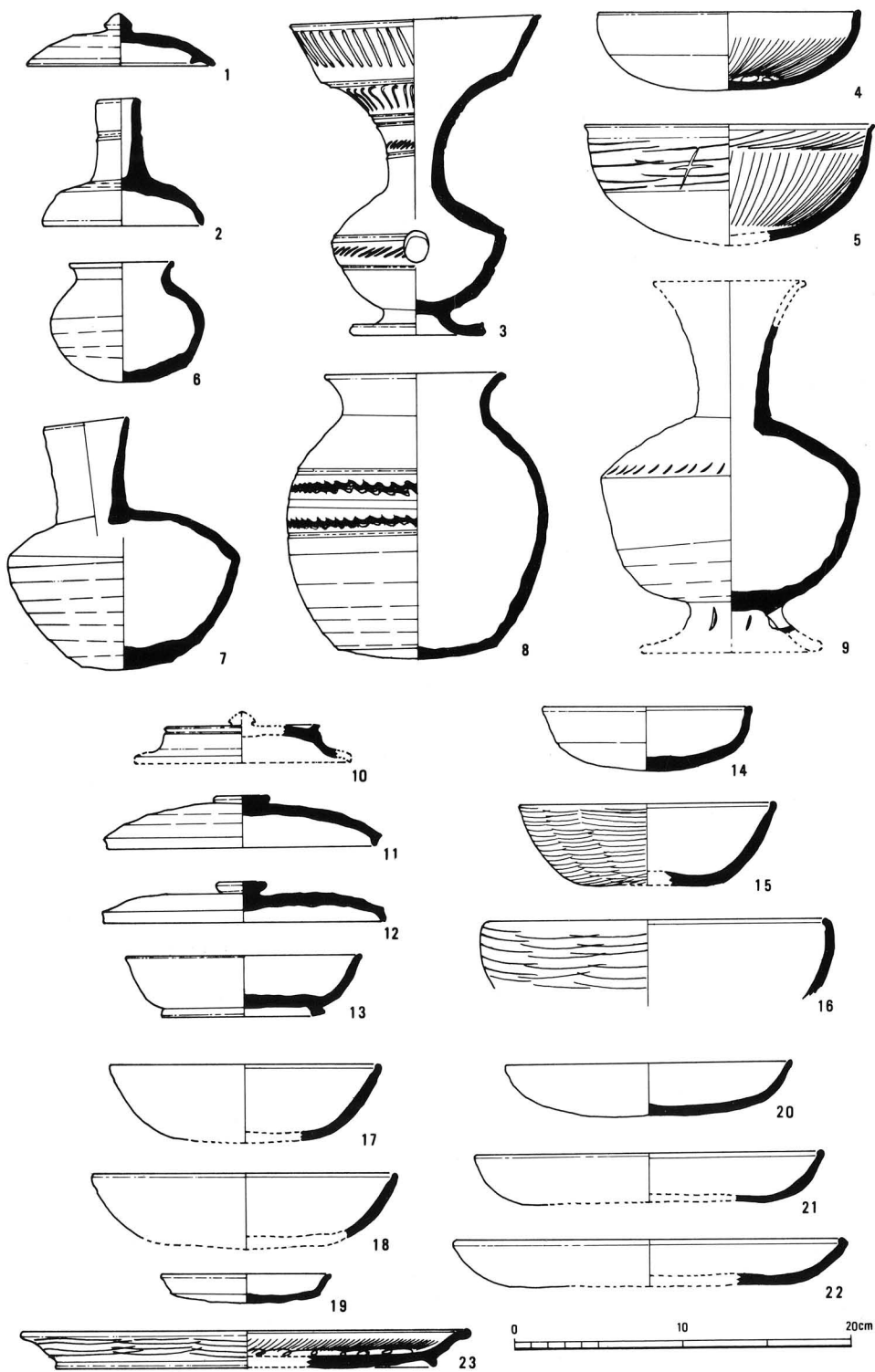
B 溝 SD 2140出土土器

第81-12-I トレンチの西辺部で検出した溝 SD 1240の埋土上層部焼土層から、少量の土器類が出土した。溝 SD 2140の埋め立て時期、西院の造営時期を考えるにあたり重要な資料である。出土した土器は、藤原宮 SD 2300¹⁰⁾・平城宮 SD 1900と共通する特徴を示し、7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる¹¹⁾。焼土層から出土した土器には、土師器の杯 A(15)、杯 C(14)・鉢 B(16)、須恵器の杯 B(13)・同蓋(10~12)がある。土師器の杯 A は比較的小型で、平底と内湾する縁部からなり、口縁端部は内側に肥厚する。底部ヘラケズリの後、外面に細く丁寧なヘラミガキを施す。内面は剝落が著しく暗文の有無はさだかでない。外反する口縁部からなり、端部が内側に折り返され、小さく肥厚する杯 A があり、外面に丁寧なヘラミガキを施し、内面にはラセン暗文・二段の斜放射暗文を施している。

杯 C(14)は完形品で、丸底に近い底部とほぼまっすぐに立ち上る口縁部からなる。口縁端部は丸くおさまる。口縁部をつよくヨコナデするため、底部の境に段が見られる。底部外面は不調整である。灯火器として利用する。鉢 B(16)は、口縁部外面はヘラ磨きののち、横位のヘラミガキを施す。須恵器の杯 B(13)は、端面が内傾する台形状の高台を付した平底と、やや内湾気味の口縁部を持つ。底部外面はヘラ切りのまま不調整である。杯 B 蓋には、頂部の周縁部に高台風の輪状のツマミを付し、縁部が「く」の字形に折れまがるもの(10)と、頂部から縁部にかけて笠形にゆるやかなカーブを描くもの(11・12)がある。前者は底部外面がヘラ切りのまま未調整である。後者は頂部外面をヘラケズリ調整する。

C 土壌 SK 2134出土土器

宝蔵殿南の81-12-I トレンチのほぼ中央部で検出した土壌 SK 2134は、西院創建当初の整地土を切って掘り込んでいる。南北幅は不明であるが、東西幅9m、深さ0.4mある。上層から10世紀前半代の土器類が、下層から8世紀後半の土器類が出土している。土師器・



第73図 7世紀前半の土器(1～9), SD 2140出土の土器(10～16),
SK 2134出土の土器(17～23)



4



5



1



6



7



2



3



8

第74図 出土の土器

黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・二彩・三彩陶器等が出土したが、いずれも細片で器形を復原できるものは少ない。ここでは、比較的残りのよい8世紀後半の土師器について報告する。

土師器の器種については、杯 A (17・18)、皿 A (20～22)・皿 B (23)・皿 C (19) 等がある。杯 A・皿 A は、外面全面をヘラケズリ調整する。皿 B (23) は、底部をヘラケズリし、口縁部外面をヘラ磨き調整する。内面には、ラセン暗文・斜放射暗文を施す。他の例よりも古く、8世紀中頃に位置付けられよう。皿 C は、口縁部をヨコナデするが、底部は不調整である。



第75図 土器に描かれた人の顔

この他、SK 2134からは、須恵器杯 A の底部外面に、墨書で小さく人面を描いたものが出土した。面長の輪郭で、頭に逆立った毛髪を顔面には「へ」の字形の眉と丸い目と長い鼻を表現している。口の部分は、墨が薄く、定かでない。耳と眼球の表現を欠く。

D 土壌 SK 2135出土土器

81-12- I トレンチ西辺部で検出した土壌 SK 2135は、東西幅9 m、深さ0.5 mで、黒褐土を埋土とし、多量の土器類が出土した。SK 2135には、焼土や炭がかなりの量含まれ、火災の後、掘られたごみ捨て穴と考えることができる。『法隆寺別当次第』によれば、延長3 (925) 年、講堂・北室等が焼失したとある。また聖霊院の解体修理に伴って行われた地下遺構の調査でも、灰層が検出され、旧僧房が焼失したと考えられている¹²⁾。また SK 2135から出土した遺物は、ほぼ10世紀前半代におさまる資料であることから、延長3年の火災が聖霊院の地域まで及ぶ大火災であった可能性がある。SK 2135からは、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・二彩・三彩陶器等が出土した。

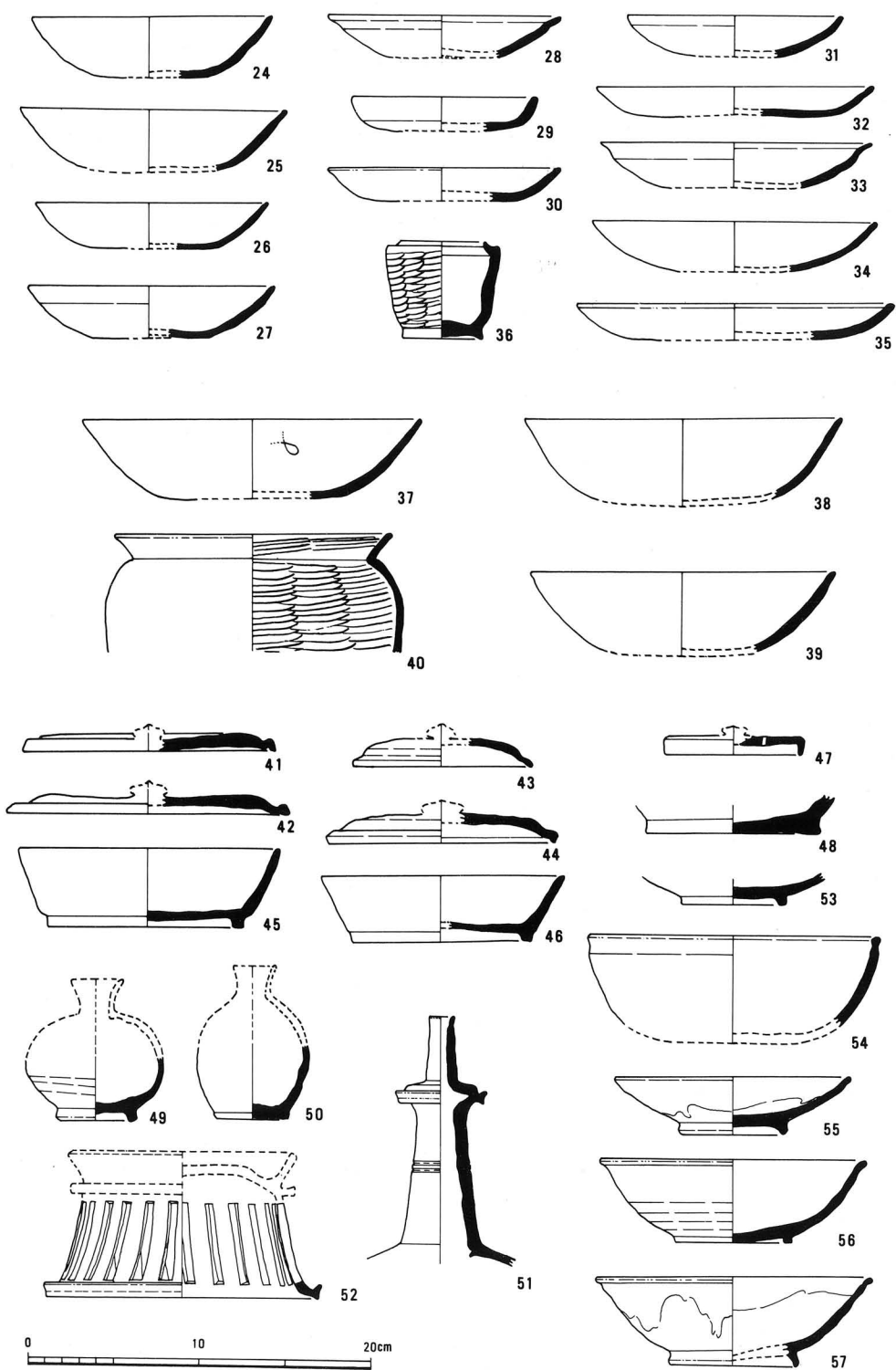
土師器の器種には、杯 A・杯 B・皿 A・碗・高杯・壺 E・鍔釜等がある。口径・器高を復原できる資料が少なく、法量の統計処理はできないが、便宜的に、口径13.5 cm以上・器高2.5 cm以上のものを杯 A、口径13.5 cm未満、高さ2.5 cm前後のものを碗として記述する。杯 A (24～27) には、口縁部外面全面をヘラケズリするもの (以下 c 手法と呼ぶ、24～26)、

木ノ葉手法	カシなどの大形の葉の表面を下にして、その上に粘土紐をまき上げて成形するものを言う。奈良時代に盛行する成形手法である。
左手手法	手の平で粘土紐を巻き上げて成形するものを言う。平安時代に盛行する成形手法である。

第2表 土師器の成形法

a 手法	木ノ葉手法で成形したのち、内面全面と口縁部外面をヨコナデし、底部外面は調整しない。
b 手法	a 手法で調整したのち、さらに底部外面をヘラケズリする。
c 手法	a 手法で調整したのち、さらに底部外面から口縁部外面全面をヘラケズリする。
e 手法	左手手法で成形したのち、内面全面と口縁部の外面上位のみを成形をかねて強くヨコナデする。

第3表 土師器の食器類調整法



第76図 SK 2135 出土の土器

口縁部上端部のみを強くヨコナデし、それ以下は不調整のもの（以下 e 手法, 27）がある。椀 A (28) は, e 手法で調整する。椀と判断できるものの大半は, e 手法である。皿には, 口径 15.6~17.8cm, 高さ 2.5~3 cm のもの (32~35) と, 口径 12.4~13.6cm, 高さ 2.5cm 未満のもの (30・31) と口径 10cm 前後の小型品 (29) がある。調整手法の上では c 手法のもの (30・32・34・35) と e 手法のもの (29・31・33)。壺 E (36) は, 口径 4.8cm, 高さ 5.6cm の小型品で, 外方に張り出す三角形の高台を持つ底部に, 筒状の胴部と蓋受状の短い口縁部を付した形態である。胴部外面はヘラケズリののち, ヨコ方向のヘラミガキを施す。

黒色土器は, 内面のみを黒色処理する A 類であり, 杯 A, 椀, 甕がある。杯 A (37~39) は, 口径 17.4~19.6cm, 高さ 5 cm 程度で, 平底と内湾気味に外方に開く口縁部からなる。口縁部外面はいずれもヘラケズリ調整するが, 37はそののちヘラミガキを施す。内面については, いずれも底部, 口縁部をヘラミガキする。37には暗文が施されている。甕 (40) は卵形の器体に, 大きく外反する口縁部からなり, 口縁部をヨコナデで, 胴部はヘラケズリで調整する。内面にはヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施す。

須恵器の器種には, 杯 B (45・46)・杯 B 蓋 (41~44)・壺 M (28・29)・壺蓋 (47)・鉢 (48)・浄瓶 (51)・台付円面硯 (52)・風字硯・甕等がある。

杯 B には, 口径 14.8cm, 高さ 4.6cm のもの (45) と口径 14.1cm, 高さ 3.9cm のもの (46) があり, 高台はいずれも台形状を呈す。底部外面は, ヘラ切りのまま不調整である。

杯蓋はいずれも縁部が屈曲する形式で, 器高が低い。法量には, 口径 16cm 以上のもの (41・42), 13~15cm (44), 10cm 前後のもの (43) がある。頂部外面の調整はヘラケズリ調整 (41・43), ナデ調整 (42・44) の両種がある。壺蓋 (47) は, 平坦な頂部と直角に折れまがる縁部からなり, 頂部外面には焼成前に穿った円形の透し穴がある。頂部外面はロクロヘラケズリで調整する。壺 M (49・50) は, いずれも胴部以下の破片であるが, ロクロ水挽成形で 50は底部を糸で, 49はヘラで切り離す。2は端面内傾する角高台を持つ。浄瓶 (51) は, 頸部に 2 条の沈線を配す。灰褐色や暗褐色に発色し, はば全面に自然釉が降着する。東海産と思われる。台付円面硯 (52) は, 硯部を欠損するが, 脚台部には 23 個の長方形の透しが施される。

灰釉陶器には, 椀 (56・57) と皿 (55) がある。56は, 口径 15.4cm, 高さ 4.8cm で低短な角高台を持つ。底部から口縁下半部をロクロヘラケズリで調整。ひたしかけで内面のみ灰釉をかける。57は, 口径 15.8cm, 高さ 5.2cm, 三日月状の高台を付す。底部は糸で切り離れたまま不調整である。皿 (55) は, 口径 13.5cm, 高さ 3.4cm, 外方にふんばる様形状の高台をもつ。口縁部内外面には, はけで灰釉を施す。底部外面は, 不調整で糸切痕をとどめる。

緑釉陶器には, 軟陶と硬陶の両種がある。軟陶には, 奈良時代の鉢 (54) と平安時代の椀・皿 (53) がある。鉢 (54) は, 口径 16.8cm に復原できる。平底と端部近くで立ち上る口縁部からなる。口縁部端面は内傾する。

硬陶は、いずれも平安時代で、椀・皿等がある。皿(53)は、底部ケズリ出しの高台を持つ。底部外面を除く部分に暗緑色の釉がかかる。底部内面には、生地焼成時と、釉かけ後の焼成時の二つの重ね焼痕跡を持つ。高台の作り、二度焼きの際にトチン等を使用していない点から、京都府亀岡市篠古窯跡で生産されたものであろう¹³⁾。

二彩・三彩は、いずれも小片で器形を復原できるものはない。釉の残りのよいものについては、巻頭図面におさめた。

E 土壌 SK 1270出土土器

81-10-Ⅲトレンチ南端で検出した土壌 SK 1270から8世紀前半の土器が少量出土した。

土師器の器種には、杯A・皿A・皿B・鉢B・甕等がある。皿B(80)は、口径28.8cm、高さ3.5cm程の大型品で、広い底部の縁辺に内傾する低短な高台を付す。内湾気味に外方に張る口縁部は、端部近くで外反し、端部は内側に折り返され丸く肥厚する。底部外面をヘラケズリ、口縁部外面を横方向のヘラミガキを施す。内面にはラセン暗文と斜放射暗文を施す。鉢B(83)は、口径23.4cm、高さ9.5cmの大型品で、底部から内湾するカーブで端部にいたり、端部は内側に折り返され、丸く肥厚する。保存状態が悪く、ミガキの有無は判断できないが、口縁部下半部から底部には、ヘラケズリ調整痕が確認できる。

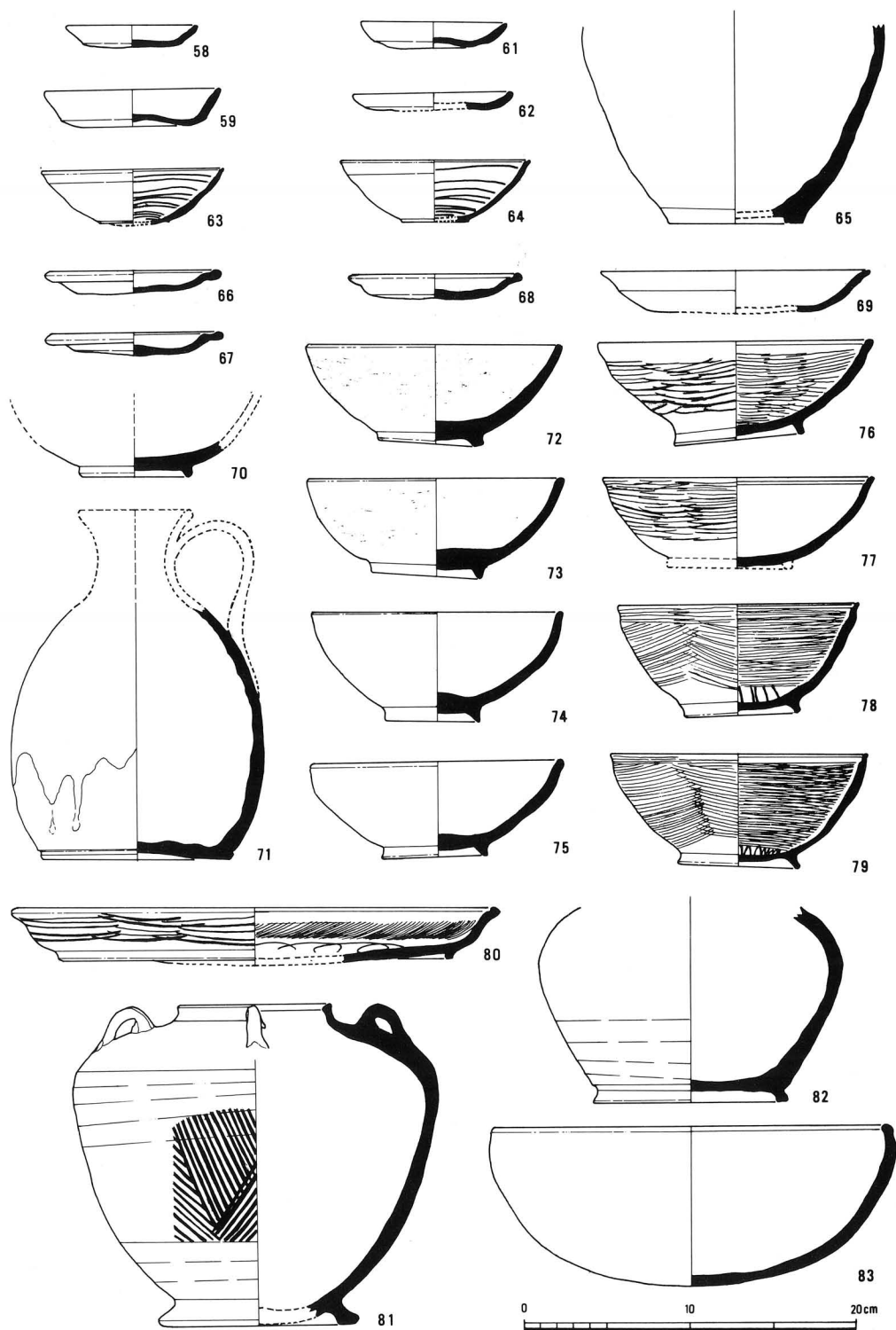
須恵器の器種には、杯A・杯B・壺・甕等がある。壺A(82)は、外方にふんばる低短な高台を持つ広い底部に、倒短形の胴部を付す。頸部より上部を欠損するが、薬壺形の器に復原できよう。底部はヘラ切りののち、ナデ調整、胴部はロクロヘラケズリで調整する。肩部には、自然釉が降着している。

壺A(81)は、口径9.0cm、胴部最大幅22.0cm、器高19.1cmを測る。肩の張った長胴形の器体に、内傾する短い口縁部と高台を付す。底部は丸底に近く、高台は外方に大きくふんばる。肩部には、半環状の耳飾りを四方に配す。胴部外面は、平行叩きを施した後、胴部上半と下半部をロクロヘラケズリ調整する。

F 土壌 SK 1230出土土器

北室院地区の81-10-Ⅰトレンチで検出した土壌 SK 1230から、銅滓や多量の瓦片に混って比較的保存状態の良い土器類が出土した。SK 1230から出土した土器類には、土師器、須恵器・黒色土器・瓦器・灰釉陶器がある。

土師器の器類には、高台付椀・皿・鍋釜がある。高台付椀(72~75)は、口径15cm、高さ6m程度で、口縁部が内湾するカーブで端部にいたるもの(72~73)、端部近くで立ち上るもの(74・75)がある。高台の形態には、断面三角形のものと梯形のものがあり、後者は少ない。いずれも、口縁部外面をヘラケズリ調整し、口縁部内外面と底部内面に粗く不規則なヘラミガキを施す。底部外面、高台部にはミガキを施さない。黒色土器のいぶし不足のものに似た色調で、灰褐～灰黒色を呈す。土師器とみなして記述したが、黒色土器の可能性も考えられる。大和では、今の所、この種の椀の類例は知られていない。河内か和泉産



第77図 SK 1270出土の土器(80~83), SK 1230出土の土器(66~79), SK 1134出土の土器(58~65)

の可能性が考えられる。時代的な位置付けについては断言できないが、伴出した瓦器碗の年代に近い時期(11世紀末葉頃)と考えている。皿には、口径10cm、高さ1.5cm程の小形品で、口縁部が大きく外反し、端部が内側に丸く肥厚するもの(66~68)と、口径16.1cm高さ2.5cm程で、口縁部が大きく外傾するもの(69)がある。前者が圧倒的に多い。前者は1段ナデで、後者は2段ナデで調整する。

黒色土器には、内面を黒色処理するA類と両面とも黒色処理するB類があり、各1点出土した。A類の碗(77)は、口径16.1cm、復原高5.5cmで口縁内面端部直下に浅い沈線をめぐらす。外面をヘラケズリしたのち、内外両面にヘラミガキを施す。B類の碗(76)は、口径16.4cm、高さ6.2cmで口縁外面に4回に分けて横位のヘラミガキを施す。底部外面・高台部には、ミガキを施さない。

瓦器碗(78・79)は、いずれも外方にふんばる比較的長い高台を持ち、口縁端部直下に沈線がめぐる。両者とも、口縁部内面のミガキは密で、底部内面には、ジグザグ暗文を施す。口縁部外面には、4回に分けて横方向のヘラミガキを施す。

灰釉陶器には、碗(70)と把手付瓶(71)がある。碗(70)は、底部の破片で断面三角形に近い高台を持つ。底部外面から口縁部にかけて、ロクロヘラケズリを施す。施釉法はハケ塗りで、内面全面と口縁部外面に灰釉をかける。把手付瓶(71)は、底部から胴部の破片で、底部と胴部の境に沈線を施し、切高台風に底部を作り出す。

G 土壌 SK 1134出土土器

中間地区の羅漢壺周辺の調査の際に検出した土壌 SK 1134から出土した土器類には、土師器小皿(58~62)、瓦器碗(63・64)がある。小皿類が圧倒的に多い。小皿には、口径8~10cm、高さ1.1~1.5cmの小皿(58・61・62)と、口径10.6cm、高さ2.2cmのもの(59)がある。いずれも口縁部をヨコナデするが底部不調整である。瓦器碗(63・64)は、口径11cm前後、高さ3.5cm前後、小型品で、底部には、矮小化した高台を付す。内面のヘラ磨きは雑で、外面には施さない。

(65)は、同トレンチSK 1135から出土した中国製の陶器で灰釉風の釉が掛け施されている。

H 土壌 SK 1065出土土器

福園院周辺の土壌 SK 1065から大量の土器類が出土した。土師器・瓦器・須恵器・陶器があり、総破片数は、3977点にも及ぶ。そのうち土師器の皿が、91%を占める。土師器の器種には、皿・釜・鍋がある。皿は、形態・調整手法から、第1表、第Ⅱ図の如く分類した。また、皿は、胎土色調の上で、次の3群に分類した。第Ⅰ群は、砂のおおい胎土で赤褐色に発色し、第Ⅱ群は、胎土は、極めて緻密な胎土で灰褐色に発色に発色している。第Ⅲ群も、Ⅱ群と同様緻密な胎土で乳白色に発色している。Ⅱ・Ⅲ群については、水籤した可能性が高い。皿の型式別個体数は、第1表を参照。皿の個体数は、各型式毎の計測可能な口縁部破片の残存する長さを総計し、各型式の平均的な口縁長で除して算出した。釜に

型式	法量(口径×高)	器 形 の 特 徴	調整手法	群	備 考
小皿 a	7.8×1.4 cm	底部上面は小山状に突出。口縁部上半は肥厚、下半はわずかにくぼむ。	口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。	Ⅲ	稲垣Ⅰ-2。(第 図1) 焼けひずみ例多い。
小皿 b	7.2×0.8	底部上面はわずかに突出。底部と口縁部の境いはまるい。	口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。	I	稲垣Ⅱ-2のニ。(2)
小皿 c	7.1×1.1	底部外面はわずかに突出。底部と口縁部の境いに明瞭な稜をもつ。	口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。	I	稲垣Ⅱ-4のホ。(3)
小皿 d	7.0×1.4	底部はまるみを帯び、底部と口縁部の境いに稜がない。	口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。見込部一方向ナデ。	I・Ⅲ	(4)
中皿 a	8.7×1.9	底部外面は浅くくぼむ。口縁部下半をわずかにくぼめるものあり。	口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。見込部一方向ナデ。	I	稲垣Ⅰ-2のイ。(5)
中皿 b	9.2×2.2	底部はややまるみを帯び、底部と口縁部の境いはまるい。	口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。見込部一方向ナデ。	I	稲垣Ⅱ-3のⅡ。(6)
中皿 c	9.9×1.8	底部は平坦で、底部と口縁部の境いに稜をもつ。	口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。見込部円形ナデ。	I・Ⅱ	Ⅱ群は口径 8.5 cm 前後で、見込は一方向のナデ。(7)
中皿 d	10.0×1.8	底部は平坦で、底部と口縁部の境いに段をもつ。	口縁部 2 段ヨコナデ。見込部円形ナデ。	I	稲垣Ⅱ-4のニ。(8)
大皿 a	17.2×	口縁部は大きく開き、口縁部上半がわずかに内弯する。	口縁部ヨコナデ。	I	稲垣Ⅱ-3のイ。(9)
大皿 b	22.5×	口縁部が大きく開き、器壁が厚い。	口縁部ヨコナデ。	I	稲垣Ⅱ-4のイ。(10)

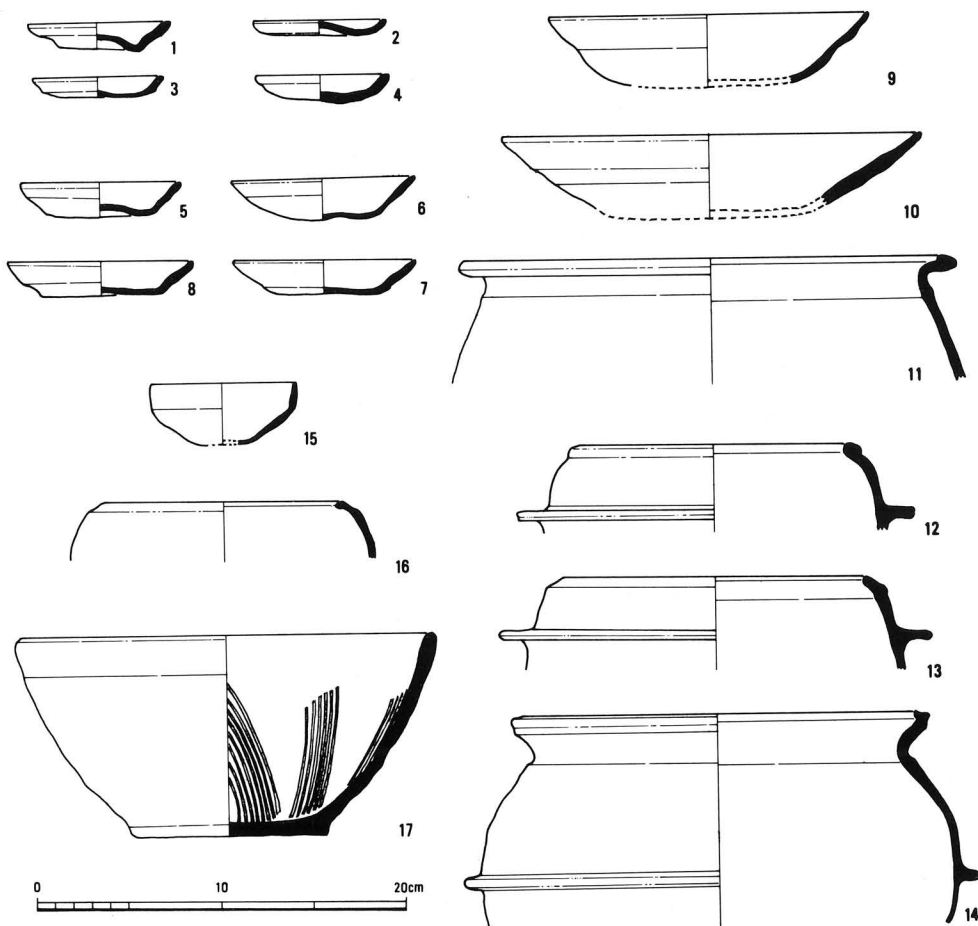
第 4 表 SK 1065 出土土師器皿分類

型式 群	小 皿				中 皿				大 皿	
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b
I	50(129)	10(29)			16(59)	2(8)	2(5)			
Ⅱ	8(26)	2(8)	(2)		4(19)	2(10)	4(23)	3(17)	3(17)	(1)
Ⅲ		7(27)	21(76)	2(8)		16(96)	75(367)	23(163)	23(163)	

第 5 表 SK 1065 出土皿型式別個体数

型式	法量(口径×高)	器 形 の 特 徴	調整手法	備 考
a	25.7×	口縁部は「く」の字形に外反、端部を内側に折り曲げる。	口縁部、肩部ヨコナデ、胴部ナデ。	灰褐色。胎土緻密。(11) 稲垣 A 型式。
b	14.6×	口縁部は内弯し、端部を外方に折り返す。銚は肩部下に貼りつける。	口縁部、額部ヨコナデ。	乳白色。胎土に石英粒を多量に含む。(12) 稲垣 B 型式
c	16.2×	口縁部は内弯し、端部を上方に折り曲げ、上面を浅くくぼめる。	口縁部をヨコナデ。	乳白色。胎土緻密。口縁部内側に焼成前に粘土小塊貼りつけたものあり。(13) 稲垣 D 型式。

第 6 表 SK 1065 出土鍔釜の分類



第78図 SK 1065出土の土器

についても、形態から a～d の四型式に分類した(第78図・第4表参照)。尚、法隆寺の中世土師器に関しては稲垣晋也氏によって型式分類が行われている¹⁴⁾。今回行なった分類と稲垣氏の分類の対応関係は、備考欄にかかげた。

瓦器は、椀・皿片合せて6片、釜9片、摺鉢48片、甕91片、火鉢12片が出土した。瓦器椀は、口径7.8cm、高さ3.3cmで、狭い平底に外反気味に外方にひろがり、端部近くで真すぐに立ち上る口縁部からなる。内外ともヘラ磨きを施さず、いぶしも十分でない。最末期の瓦器椀の一列に位置付けられよう。

須恵器は、鉢2片、甕13片、陶器は、椀2片、摺鉢2片、甕17片が出土した。土師器、瓦器に較べ、須恵器、陶器は、量的に少ない。SK 1065 から出土した土器類の年代は、15世紀前半を中心とする時期で、その前後の時期のものも少量含まれていると考えられよう。

3. 木製品・石製品・金属製品・ガラス製品

A 木製品 (第79図 7～13)

木製品は、池や井戸埋土から漆器・容器・板物・祭礼具などが若干量出土した。

漆器 (7・8) 高台付椀と容器の蓋がある。7は口縁端部と高台部を欠損するが、現存部からみて径12cm、高さ6.6cmに復原できる。器壁は厚く、生地表面を仕上げたのち下地を施し、内外面に黒漆を塗り、内面はさらに朱漆を重ねる (SG1410 下層)。8は逆印籠蓋型式の蓋。一辺約5.4cmの方形で四角は隅円とし、甲盛とする。蓋髪の縁は貼り付け手法によっている。外面は黒漆を、内面は朱漆を塗る。布着はない (SG1113)。

容器 (11) 曲物底板がある。針葉樹柾目板で大事を欠損するが、復原径30cm。側板に留めた木釘穴2ヵ所をとどめる (SE1111)。

板物 (9・10) 9は脚台部。梯形で上底中央に柄を削り出す。上底部に別材との組合せ痕が残る。両側辺下底部は面どうし、横断面形はゆるく湾曲する。広葉樹板目板 (SE1111)。10は白木箱。長辺12cm、高さ6cmの箱で側板のみほぼ完存する。作りは木口に釘で留める^{いもづけ}芋付法により、一部に木釘が残る (SG1113)。江戸時代であろう。

祭礼具 (12・13) 両側とも側面形の人形である。12は烏帽子姿の側面を表現したもので下端を欠損。現存長8.6cm。13は全長34.6cm。上端は顔の側面形をかなり忠実に写すが、下端には手足などの表現はみられない。ともにSG1024埋土出土。中世の人形であろう。同時代の人形として広島県草戸千軒町遺跡¹⁵⁾、大阪府新家遺跡¹⁶⁾例に次ぐものである。

B 石製品 (第79図 2・3)

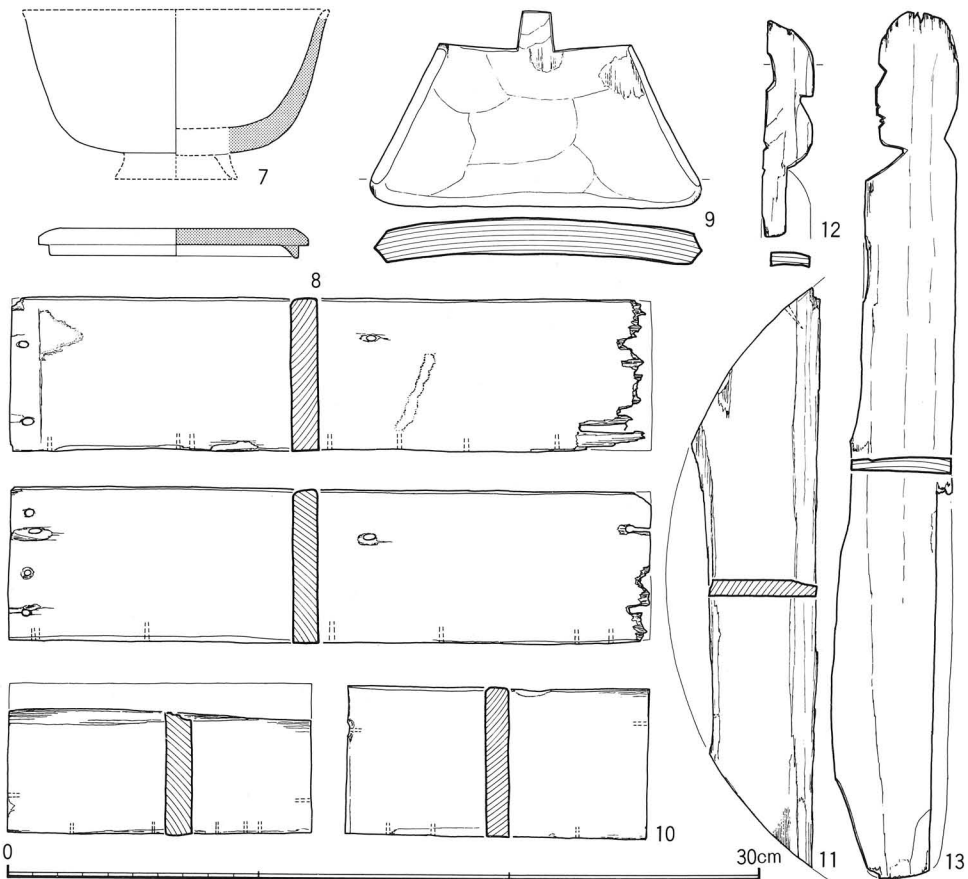
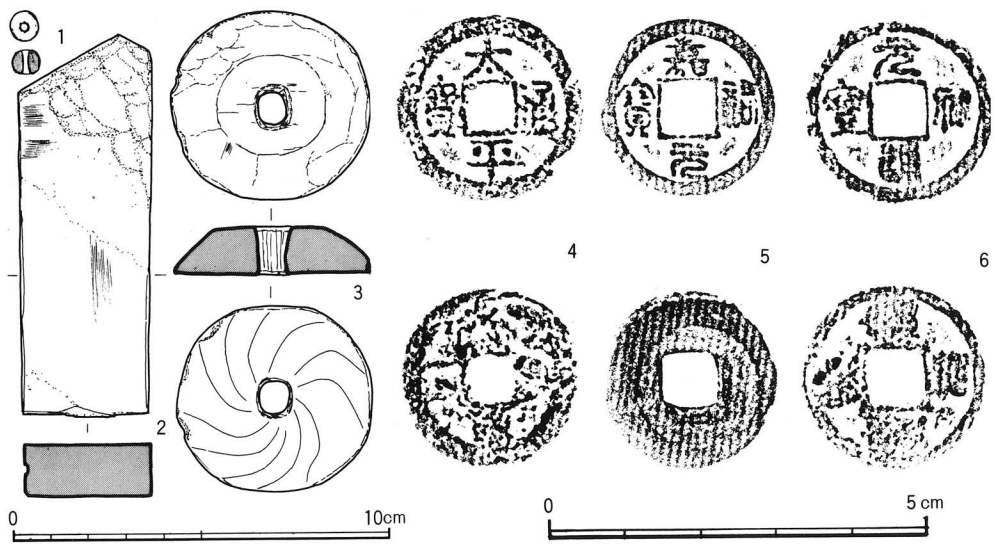
砥石、紡錘車、石鍋などがある。2は砥石。灰黄色の軟質の石で、幅3.4cm、長さ10cm、に切断している。厚さは1.4cm。一方の面のみ使用したもので、微細な磨き痕がある (81-10-1 トレンチ整地土)。他にも長さとは異なるが、同じ幅に切断した砥石が3点出土している。3は紡錘車。緑泥片岩系の石を加工した載頭円錐形で、上底面、下底面ともに不整形 (下底面5.1×4.9cm) で、中央に径0.9cmの貫通孔がある。表面は丹念に磨き調整するが、周縁には敲打痕が残る。下底面表面には細刻線による曲線文11条を施す。重さ49.6g (SG 2111 下層)。

C 金属製品 (第79図 4～6)

金属製品には鉄釘、鍵、銭貨がある。ここでは銭貨を紹介する。銭貨は輸入銭7種と寛永通宝で、図示したのは外国銭のうち3種 (1—大平通宝、2—嘉祐元宝、3—元祐通宝) である。1は976年 (太宗)、2は1056年 (仁宗)、3は1086年 (哲宗) 初鑄である。

D ガラス製品 (第79図 1)

緑色を呈したガラス玉。直径0.8cm。ほぼ中央に径0.15cmの貫通孔がある。表面は若干風化しているが、保存状態良好。ガラスの原材料については分析中のため、詳細は別の機会に譲るが、鉛は検出されておらず、他のガラスの可能性が高いという (SD 2140 出土)。



第79図 木製品(7～13), 石製品(2・3), 金属製品(4～6), ガラス製品(1)